センターキッチンにおけるコミュニケーション機能

押岡 由美 [1]
城 仁士 [2]（joh@kobe-u.ac.jp）
〔[1] 株式会社旭化成リフォーム・[2] 神戸大学〕

Function of communication at center-kitchen

Yumi Oshioka [1]
Hitoshi Joh [2]
[1] Asahi-Kasei Reform Corporation, Japan
[2] Faculty of Human Development, Kobe University, Japan

Abstract

Due to the individualization of family, their gathering place in a house has been changing from a Living room to a Dining-kitchen. In this research, we survey family's communication style in their house. At the same time, we examine "Center-kitchen" that has the promotional communicating function for the future fireside place of family. It is not the most important point if people use Center-kitchen or not, but its image is, "the space where each family member can have a good communication and has enough space not to disturb family's activity." In the family who use Center-kitchen, we can see that everyone naturally help housework, they share the good time in the kitchen, and having meals together is becoming the most important time for their life. Center-kitchen hasn't been valued because people are distressed about arrangements. Although kitchen is becoming opened-space today, most of people still think it is an occupied space by housewives or women. However, since Center-kitchen satisfies people's food-centered life, an influence of physical aspect is compensated. It is predicted each family's life style will be diversified from now on, and at the same time, the concept of how kitchen should be will be variously changed. We need to notice an importance of choosing the most suitable kitchen for each family.

Key words

center-kitchen, communication in a kitchen, food-centered life

1. 問題と目的

本研究では、現代の家族のライフスタイルに適応する新しいコミュニケーションの場を模索する意図から「キッチンのボーダレス化」に着目する。

現代のキッチン空間の変遷は、社会的な要因により大きな影響を受けている。北浦・辻野（2003）はキッチンを「社会的な食生活システムの一環を家庭にあって分担し、それを通じて生活の多面的な内容とかかわりあう場」と定義している。キッチンのボーダレス化現象を誘発している社会的要因については、二つの時代傾向があると考えられる。

第一に、女性の社会進出に伴い、キッチンは「女の城」であるとの認識が薄れてきていることがあげられる。女性は従来のような「妻は家庭に居て家庭を整え家族の中心にあって家族の心身を癒すもの」（森岡, 1974）の前提にたった「団らんの準備者」の位置付けだけでなく、「団らんの享受者」としても位置付けられなければならない。つまり、夫婦共に仕事をする生活様式の下では、家庭生活における「夕食・団らん」は、家族全員のそれぞれが外の緊張や疲労を持って帰ってきており、そのことを前提として家族全員で協力して準備・セッティングし、そしてまた家族全員がそれを享受するということによって成り立つ。その為、キッチンは女性の占有空間から、家族全員の共有空間へと認識が変化し、キッチンのボーダレス化現象の一因になっていると思われる。

第二に、家族一人ひとりの生活時間帯のずれの拡大や、それを容認する社会体制があげられる。父母が労働時間が長いために帰宅時間が遅くなり、子供は塾等の為に夕方から夜にかけての在宅時間が短いことなど、家族の生活時間帯のずれが生じている。現代の日本社会は、勤労者の労働の場としての企業や教育の場としての学校、その他もろもろの行動の場によって、家庭生活の時間はさらに短くなっている。その為、家族全員が使用頻度の高いキッチンが限られた時間内では集いやすい場として、よりオープンな空間へと変容を遂げていると考えられる。

前述の様に、キッチンのボーダレス化を社会的要因から考察していく上で、家族団らんとの関連が重要である。これまでに、キッチンの形態別にみた団らん参加実態および団らん空間に関する研究は、「キッチンにいる主婦の団らん参加」という視点から、太田・梁瀬（1990）によって明らかにされている。太田・梁瀬の「キッチン空間を家族のコミュニケーション空間とする」提案を踏まえて、宮下（1995）は、家族にとって開かれたキッチン、複数人でも作業しやすいキッチン、コミュニケーション空間であるキッチン空間を中心に考察している。宮下によると、キッチンでコミュニケーションをとる際に重要な要因は、「食

堂とキッチンが近いこと」、「広いこと」である。更に、キッチン空間をリビング（以下L）とダイニング（以下D）の間に配置することにより、どこからでもキッチンで作業する人の姿が見え、家族の家事参加が自然に促されると仮定している。また、人の流れが、食事前：団らん空間（L）→キッチン（K）→食事空間（D）、食事後：食事空間（D）→キッチン（K）→団らん空間（L）となるため、食事の準備、後片付けに家族が参加しやすくなるとして、コミュニケーションが充実する可能性を高める空間を提案している。

橘田ら（1991）は、子供のいる共働き家庭の視点から、食事中と家事におけるコミュニケーションについて述べている。橘田によると、共働きは専業主婦家庭に比べ、とりわけ家族全員で食卓を囲む機会が多いという。これは、朝は妻も出かけるために、時間の都合上食事を一度ですませたいし、夜は帰宅後に作り始めるため食事時間が遅く、その分家族全員がそろう機会が増えることによる。岸本・中西（1991）も、「家族全員を対象とした団らんの成立は、食事系行為を媒体として成立しやすい性格を有している」と述べている。共働きの夫婦が増えている現代においては、一緒に家事をし、コミュニケーションを行うことの重要性を強調する動きもある。

キッチンそのものを団らん空間に近づける動きがある一方で、女性の社会進出に伴い家庭内の食生活の外部化も進んでいる。「家族は、食卓という場で共に食べる行為を共有することで、たがいの絆も確かめあってきた」（黒岩，1986）が、現代においては、食生活の本質を考えて生活するというよりは、勝手気ままに食べたいものを食べるという、さして重要でもない個人的な生理的行為となりつつある。

以上のことから現代におけるキッチンのボーダレス化現象の社会要因を整理してみると、次のようになる。

① 女性の社会進出に伴い、キッチン空間が女性の占有空間から家族の共有空間へと変容している。
② 家庭生活のための時間が、もともと短くしか確保されておらず、そのため、住まいにおいて家族全員の使用頻度が高い共有空間であるキッチン空間がよりオープンな空間として求められるようになっている。
③ 食生活の外部化や冷凍加工食品の浸透により、調理や食事に対する認識も多様化し、キッチン空間もそうした価値観に合わせて多様化している。

本研究では、家族の個別化が進む現代の住まいにおいて、新たなコミュニケーションの場を模索する意図から、キッチンのボーダレス化に着目し、現代の家族のライフスタイルに適応し、かつコミュニケーションの活性化を期待できるセンターキッチンを取り上げる。

キッチンそのものを住まいの中心とし、家族で調理できるセンターキッチンは新しい団らん形式の創造であり、台所史上特筆すべきことである。しかし、センターキッチンで行われるコミュニケーション機能について検討した研究は、これまで行われていない。

そこで本研究では、コミュニケーションの場としての「センターキッチン」について、その現状とこれからの課題を検討する。しかしその際、「全ての家族のライフスタイルに適応するわけではなく、多様化するキッチンの一形態である」ことに注意し、「家族全員が揃う団らんは食を媒体としやすい」こと、「キッチンと食事空間を近づけることは団らん空間の成立を高める可能性がある」ことから、センターキッチンを「食が本来持っている家族の絆を強める機能に期待し、個別化が進む現代において家族のコミュニケーションが可能となる場」として注目する。さらに、キッチンの変遷は女性の価値観の多様化、社会進出に多大な影響を受けていることから、女性の視点から、特にキッチンにより関わりがあると考えられる既婚女性の視点から、センターキッチンを検討することにした。本研究では、センターキッチンを「対面型アイランドであり、アイランド部分にコンロ、もしくはシンクがあり、リビング、ダイニングと一体でオープンな空間」と定義する。

まず研究Ⅰでは、実際に行われている家族での団らんを概観するとともに、センターキッチンの認知度やイメージについての質問紙調査を行う。その調査結果を踏まえて、研究Ⅱでは、センターキッチンを実際に使用した際に可能となるコミュニケーション機能について検討する。以上の2つの研究を通じて、家族の絆が懸念される現代において、これからの団らん空間としてのキッチンの役割を考察する。

2. 研究Ⅰ：センターキッチンのイメージ調査

2.1 目的

本研究では実際に行われている家族での団らんを概観するとともに、センターキッチンの認知度、イメージについて検討する。そして、現代の家族が好むLDK空間とキッチンの形態の関わりや、センターキッチンの一般的なイメージについて検討する。

2.2 方法

対象者及び実施時期：独自に作成した質問紙により、個別に調査を行った。主な調査内容は、①対象者属性、②現在の団らんの状況に対する評価、③センターキッチンに対するイメージ評価である。

既婚女性を対象に、直接あるいは知人を介し、2003年6月から8月の間に質問紙の配布、回収を行った。回収数は148通で、うち106通を有効回収分として分析に供した。主婦の平均年齢が33.6歳、平均家族数が3.5人であり、45.3％が有職であった

2.3 結果および考察

2.3.1 団らんの満足・不満足とキッチン形態との関係

現在の団らんの満足な点と不満足な点の要因はどこにあるのかを現在のキッチン形態との関係で整理したものが表1である。上段に満足、下段に不満足の場合をそれぞれ示す。満足あるいは不満足な要因としてあげられた様々な記述を宮下（1995）の研究を参考にして次の7つに分類した。

表１：現在の団らんにおける満足・不満足の要因

	（N=101）	K	LDK	広さ	明るさ	来客	その他	なし	計
	対面LDK	26%	8%	2%	1%	0%	3%	2%	42%
	背面LDK	2%	10%	2%	1%	0%	4%	7%	26%
満	側面LDK	0%	4%	0%	0%	0%	1%	1%	6%
	背L＋DK	0%	7%	0%	0%	0%	2%	9%	18%
足	側L＋DK	0%	0%	0%	2%	0%	1%	1%	4%
	独LD＋K	2%	2%	0%	0%	1%	0%	1%	5%
	独L＋D＋K	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	計	29%	31%	4%	4%	1%	11%	21%	100%
	（N=101）	K	LDK	狭さ	明るさ	来客	その他	なし	計
	対面LDK	6%	7%	8%	0%	2%	6%	12%	40%
不	背面LDK	7%	4%	4%	0%	0%	4%	6%	25%
	側面LDK	1%	3%	1%	0%	0%	0%	0%	5%
満	背L＋DK	4%	4%	3%	0%	0%	6%	1%	18%
	側L＋DK	0%	0%	2%	0%	0%	1%	1%	4%
足	独LD＋K	5%	2%	1%	0%	0%	0%	0%	8%
	独L＋D＋K	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	1%
	計	23%	20%	19%	0%	2%	17%	20%	100%

Kはキッチン形態と団らんとの関わり、LDKはLDK空間と団らんとの関わり、広さ（狭さ）は団らん空間の広さ（狭さ）、明るさは団らん空間の明るさ、来客は来客とのコミュニケーションに関する要因である。その他は団らんとは直接関係がないもの、なしは特になしと記述したものである。また、第2列は現在保有するキッチンの形態を示すもので、対面（対）、背面（背）、側面（側）はそれぞれ対面型、背面型、側面型キッチンを意味し、独はキッチンが遮蔽され独立していることを示す。表中の数字は満足、不満足別に各要因の出現割合（要因内記述数／総記述数）を現在保有するキッチンの形態毎に示したものである。

表1によると、対面型LDKにおいて、現在の団らんの満足要因は「キッチン形態（26%）」が最も多く、「カウンターキッチンなので料理や片付けをしながらでも団らんに参加できる」、「KがLDと一体化しているので家族との会話がしやすい」などの理由があげられた。一方、対面型LDKの不満足要因で「キッチンの形態（6%）」が理由にあがっているが、これは「オープンなので調理中に子どもがよって来て危ない」などであり、対面型という形態に対しての不満ではなかった。

次に、対面型・背面型LDKにおいて、「LDK空間（それぞれ8%、10%）」を団らんの満足要因にしていた人は、「台所からもリビングからも食卓テーブルが近い所にあるので、孤立した感じにはならない」、「LDKで一部屋なので、どこにいても団らんに参加できる」という理由をあげている。

一方、独立型LD＋K空間において、「キッチンの形態」を団らんの満足要因（2%）としていた人は、「台所が独立していて来客の時によい」など、家族以外の人とのコミュニケーションに重点を置いていた。不満足要因（5%）としては、「調理中の団らんはあまりできまない。広いリビングがあれば対面式キッチンにあこがれる」など、家族とのコミュニケーションについての不満が示された。

以上の結果から、L・D・Kのそれぞれの空間に独立性をもたせるのではなく、食事を媒体としてLDKの空間を一体化させることにより、団らんの満足度が高くなっていることが示唆された。

2.3.2 センターキッチンに対するイメージ評価

センターキッチンの認知度は、全体の7割近くと高かったものの、「使ってみたい」と回答した人は3割近くであった。しかし、図1に示したように、そのイメージ評価は物理的側面、特に整理整頓の面において低くなっている。整理整頓の必要性、匂いや音、一般的な間取りではないなど、物理的側面からセンターキッチンの評価は下がっており、実際に使用することに関してはかなり抵抗感があるようだ。このことは、キッチンはオープンな空間となってきているものの、いまだ主婦の専有空間という意識から、整理整頓を主婦自身が担っていることが原因であるといえる。また、匂いや音などはLDKが一体となった空間では、リビングに直接影響を与え、リビングでの団らんを阻害する要因となることも推測される。

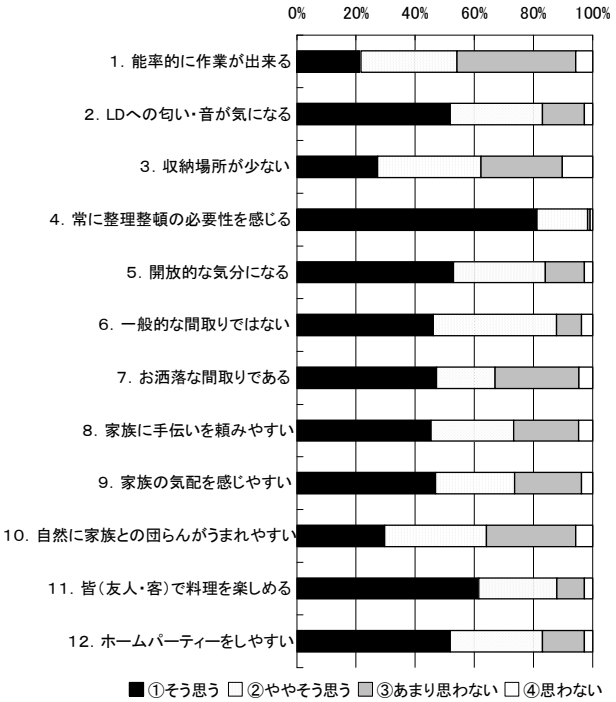

図1：センターキッチンに対するイメージ

センターキッチンにおける家族とのコミュニケーションについては、全体的に評価は高かった。「家族に手伝いを頼みやすい」と「家族の気配を感じやすい」の項目において「そう思う」、「ややそう思う」を合わせるとそれぞれ全体の7割近くを占めている。また「開放的な気分になる」という項目に対しても8割以上を占めていることから、センターキッチンは広い空間であり家族が集まりやすく、動線上、家族の動きをさまたげにくい空間であるとのイメージが持たれているといえる。また「自然に家族との団らんが

うまれやすい」の項目については、「そう思う（29%）」、「ややそう思う（34%）」を合わせても6割近くに下がっていることから、家族の家事参加を団らんと考えていない人もいることが示唆された。さらにセンターキッチンにおける家族以外とのコミュニケーションについても全体的に評価は高い。「皆（友人・客）で料理を楽しめる」では「そう思う」、「ややそう思う」を合わせると全体の9割近くを、「ホームパーティーがしやすい」では全体の8割を占めており、センターキッチンが大勢で調理することに適していること、キッチンに他人が入ることへの抵抗感があまりないことなどが示された。

これらを踏まえた上で、研究Ⅱでは、センターキッチンにおいて実際に可能となる団らんについて検討するとともに、物理的側面が団らんに与える影響についても検討する。

3. 研究Ⅱ：センターキッチンにおけるコミュニケーション特性

3.1 目的

研究Ⅱでは、センターキッチンにおいて可能となるコミュニケーションについて検討する。研究Ⅰで、センターキッチンは「家族の団らん空間の可能性を高める」とのイメージがありながらも、物理的側面（整理整頓の必要性、匂いや音等）や現実的な間取りではないとの認識から、実際に使用することに関しては抵抗感があることが示唆された。そこで研究Ⅱでは、実際にセンターキッチンを使用している家庭の事例を採取し、(1) センターキッチンで可能となるコミュニケーション機能、(2) センターキッチンの物理的側面への対処を検討することを目的とする。

3.2 方法

調査対象者は研究Ⅰで実施した質問紙調査において、実際にセンターキッチンを使用している3名を選定し、1対1の半構造化インタビューを行った。調査内容については、研究Ⅰで実施した質問紙調査の回答を基に、次の項目について述べてもらった。

①センターキッチンによる、対象者を含む家族の活動の変化、②センターキッチンの物理的側面（収納、匂い、音、スペース、作業上の機能性）、③センターキッチンにおけるコミュニケーションの内容、④センターキッチンで可能となる家族以外とのコミュニケーション、⑤センターキッチンを使用した感想。

手続としては、2003年7月～2004年4月に各対象者につき1回実施した。1人当たりの面接調査時間は1時間から1時間半程度であった。調査において補足及び確認すべき内容があった場合は、後日、面会、電子メールあるいは電話により追加調査を行った。

3.3 結果と考察

センターキッチンにおける各対象家庭でのコミュニケーション機能の特徴はそれぞれ以下の通りであった。

＜Aさん宅の場合＞

Aさんは、センターキッチンにしたことで、「家族のコミュニケーションに変化はなかった」と語ってくれた。その理由として、もともとAさんの家庭では、食を中心とした家族のコミュニケーションが成立していたこと、ご主人が家事に協力的であり、センターキッチンにする以前から子供もキッチンに頻繁に出入りしていたことから、キッチンが家族にとって、既にオープンな共有空間となっていたことがあげられる。また、センターキッチンの収納スペースをオープンにすることにより、家族もしくは家族以外でも気軽に調理に参加できる空間がつくり出されており、このことからも、Aさんにとってすでにキッチンは女性の占有空間ではなく、共有空間として捉えられていたといえる。

Aさんは一貫して「食事を生活の中心としたい」との姿勢をとっており、実際に食に関する行為を家族みんなで行うことで、夫婦共働きで限られた時間でありながらも、家族が揃っている時には、「家族がいつも一緒にいる」状態を可能にしている。現代においては、子供の食への興味が失われつつあるとの見解があり、北浦・辻野（2003）は、「子供の調理離れの原因に親の態度があげられる」と述べている。子供が調理に強い興味を持つ頃に、親の都合で「あっちに行ってなさい」と突き放してしまっていることも一因であるという。Aさん宅では、子供も積極的に調理に携わっている。Aさんのように働きながら「食事を生活の中心」とする家族のコミュニケーションを成立させる場合、子供が小さくても調理に携わることのできる環境を整え、家族全員で協力して家事に取り組み、キッチンを家族の共有空間として捉えることが重要であることを示唆している。

＜Bさん宅の場合＞

Bさんはセンターキッチンにする際、開放感とインテリア性のみを重視しており、コミュニケーションについては、全く考えていなかったことを語ってくれた。しかし、夫が調理に携わるようになり、家族以外の人に対しても、家事作業をしながらコミュニケーションが図れるようになったという。Bさんの家庭ではセンターキッチンにしたことで、意識しなくても自然に家事作業がコミュニケーションの一部へと変化したようである。その要因については、センターキッチンからLD空間への見通しが良いこと、キッチンに複数人いても動きが妨げられず、スムーズに家事作業が行えることをあげている。

またBさんは以前、センターキッチンに対して整理整頓の必要性を強く感じていたが、センターキッチン内での自身の動線を十分配慮した上で収納計画をしたことから、整理整頓がしやすく掃除もしやすいなど、以前のキッチンよりも負担が軽減されている。加えて、オープンな空間である為に、人に見られるという意識が働いて「負担になるのでは」と危惧していたが、現在では、その意識は積極的にキッチンを整理整頓する行為の誘因となっている。しかし一方で、Bさんにとっては、たとえキッチンがオープンな

空間となり、複数人で調理することができるようになったとしても、自分が整理整頓しなければならない空間である、との意識が存在していることは明らかである。つまり、B さんにとってキッチン空間は、A さんのように意識の上でも完全に共有空間であるとはいえない。

＜C さん宅の場合＞

C さんはセンターキッチンにしたことで、「家族がキッチンに自然に集まるようになった」と語ってくれた。しかしC さん宅の場合、A さん宅のように食に関する行為を媒体として「家族がいつも一緒にいる」のではなく、食に関する行為以外にも、それぞれが違う行為をしながらキッチン空間を共有しており、その為に十分なコミュニケーションがなされているようである。その要因として、アイランド部に調理作業をする以外の十分なスペースの存在があげられる。

また、C さんはインテリアにも十分配慮しており、一見したところ、キッチンは居室の一部であり、非常にシンプルで生活感も出ていない。C さんは、④「センターキッチンで可能となる家族以外とのコミュニケーション」の項目で、「お食事にお呼びした方たちが、（食事の後）必ずお片づけを手伝ってくれるんです。キッチンに入る感覚がないみたいです」、「お客様もキッチンの方が気楽みたいです」と語ってくれた。センターキッチンが複数人でも作業がしやすいことの他に、C さん宅の場合は、キッチンに生活感が出ておらず、居室の一部のような感覚を与えるため、家族以外の人もキッチンに自然に入りやすいことが推測される。そして、C さんも B さんのように整理整頓は自分がしなければならないとの意識を持っていることから、キッチン空間は完全には共有空間ではないといえる。

以上のことから、センターキッチンでは家事作業もコミュニケーションの一部となり、複数人での作業に適していることが明確になった。しかし一方で、研究 I で示されたように対面型キッチンにおいても家事作業をしながらコミュニケーションを図れる可能性も残された。そこで、次にセンターキッチンと対面型キッチンにおけるコミュニケーションの違いについてのインタビュー内容を考察する。

3 名の対象者はいずれもセンターキッチンと対面型キッチンにおけるコミュニケーションは、明らかに違うことを語ってくれた。その違いについては、センターキッチンはアイランド部を四方から囲める空間であり、対面型キッチンよりもさらにオープンな空間であるために、キッチンに入りやすいこと、複数人いても調理作業がスムーズであることを指摘してくれた。つまり家族に家事を手伝ってもらうというのではなく、自然に家族の家事参加を促す機能があると考えられる。さらに、センターキッチンは対面型キッチンと比較して、家事作業も団らん行為とすることが可能であり、また主婦の団らん参加を阻害しないことから、対面型キッチンよりも、家族の団らん空間の可能性を高めることがすべての対象者のインタビューから得られた。

4. 総合考察

ここでは、2つの調査研究から得られた知見を総合する。

研究 I から、団らん空間としては、L・D・K のそれぞれの空間に独立性を持たせるのではなく、「食事に関する行為」を媒体としながら LDK 空間を一体化させることにより、主婦の団らんの満足度が高くなることが示唆された。これには、「調理をしながら家族の様子がわかる」などの理由があげられており、主婦が家事行為をしていても、家族の団らんに参加すること、家族との親密感を増すことを望んでいる様子がうかがえる。

しかし、主婦の団らんの満足度が高い「対面型キッチンの LDK 空間」であっても、キッチンにいる主婦が、LD にいる家族の様子がわかりにくい空間設定では、団らんの満足度は下がる。このことから主婦は、LD にいる家族の様子をキッチンから見渡せる形態を好んでいることが明らかになった。

研究Ⅱでは、センターキッチンを使用している家庭において、いずれも家族が自然に家事に参加する、家族がキッチンで団らんをする、或いは食を生活の中心とするなどのコミュニケーションが認められた。さらに、センターキッチンは対面型キッチンと比較して、キッチンで家事作業をしていても、家族との疎外感はあまり感じられないとの報告が得られた。これは、センターキッチンでの家事作業はそのまま団らん行為とみなされることを意味しており、家事作業も団らんと捉える家庭においては、家族間コミュニケーションを高める可能性があるといえる。

また、家族以外とのコミュニケーションについても、センターキッチンはキッチンとしての境界があいまいである為、家族以外でも気軽に立ち入ることができる。主婦が家事作業をしていても訪問者とのコミュニケーションが途切れないなど、センターキッチンのコミュニケーション機能は、家族以外にも適用できることが示唆された。

一方、センターキッチンの物理的側面については、整理整頓の必要性のイメージが、実際に使用することへの意欲を下げていることがわかった。ところが研究Ⅱのインタビューでも触れたようにセンターキッチンを実際に使用している人たちは、そのことをほとんど気にしていない。匂いや音に関しても影響はないとしており、うち 2 人は、家族が自然に家事に参加するようになった、自然にキッチンに集まるようになったなど、新たなコミュニケーションの場の創出の方に価値をおいた感想が述べられた。

以上のことから、センターキッチンを計画する際、家族の共有空間として家族全員が協力して設計することが望ましいといえる。収納スペースもオープンにするには、家族全員の協力がなければ、主婦一人でその負担を背負うことになり、センターキッチンのコミュニケーション機能が充分に活かされない事態も生じるからである。

現代においては、女性の社会進出の増加や、家族一人ひとりの生活時間帯のずれや拡大、それを容認する社会体制により、家族のあり方はさらに多様化する可能性がある。

キッチン空間は女性の意識と共に、今後も変容を続けていくであろう。キッチン空間を家族の共有空間にするかどうかは、家族のあり方にもよるが、これまでの流れを受けると、女性の占有空間としての意識は、増々薄れていくものと思われる。

付記

本論文は、押岡由美が平成16年度に神戸大学大学院総合人間科学研究科に提出した修士論文「センターキッチンに関する研究―キッチン内のコミュニケーション機能に着目して―」の一部を指導教員の城仁士が編集・推敲し、論文投稿したものである。

引用文献

岸本幸臣・中西眞美　1991　だんらん空間に関する研究（第 1 報）　だんらんの実態把握のための予備的考察　Ann.Physiol,Anthrop.　10(1): 35-45

岸本幸臣・中西眞美　1991　だんらん空間に関する研究（第2報）　だんらん空間の使い方と家族観に関する研究　Ann.Physiol,Anthrop.　10(1): 47-60

北浦かほる・辻野増枝　編著　2003　台所空間学辞典　彰国社

橘田洋子・山田穂積・久保裕之　1991　子どものいる共働きの暮らしについての調査 : その4コミュニケーション状況からの分析　日本建築学会大会学術講演梗概集E　建築計画　155

黒岩史成　1986　「食卓の情景」の変化と外食産業戦略の目指すもの　サラリーマンライフ　日本放送出版協会　2 巻　8 号

宮下綾子　1995　コミュニケーション空間としての台所　家族の自立を可能にするための住居計画的研究　日本建築学会近畿支部　研究報告集　289-292

森岡清美　1974　新家族関係学　中教出版

太田さち・梁瀬度子　1990　キッチンとのかかわりからみた団らん空間のあり方に関する調査研究（第 2 報）　主婦の団らんへの「ながら参加」の実態からみたキッチンおよび団らん空間の評価　日本家政学会誌　41巻　9号　881-886

参考文献

天野彰　2000　いい住まいの本　PHP 研究所

兵庫県長寿社会研究機構　家庭問題研究所　2001　家族、地域のコミュニケーションを図る住まい等に関する調査研究報告書

市毛直道　1999　食のゆくえ　食の文化　第7巻　味の素食の文化センター

北川圭子　2002　ダイニング・キッチンはこうして誕生した　女性建築家第一号　浜口ミホが目指したもの　技報堂出版

三村浩史　1989　すまい学のすすめ　彰国社

村上正代　秋山晴子　1990　家庭教育における住教育についての考察　食事・団らん空間と家族関係　福岡教育大学紀要　第 39 号　第 5 分冊　145-155

日本放送出版協会　1983　NHK 放送世論調査所編　日本人の食生活

太田さち・河野安美・渡辺崇子・國嶋道子・梁瀬度子　1989　団らん空間に影響を及ぼす諸要因に関する研究（第2報）　主婦の意識を通して見た団らんの実態　日本家政学会誌　40 巻　1 号　69-73

ドロレス・ハイデン　1991　アメリカン・ドリームの再構築　住宅・仕事・家庭生活の未来　勁草書房

山田初江　1984　居間の家族学　グロビュー社

山口昌伴　2000　台所空間学（摘録版）建築資料研究社　227-229

（受稿 : 2006 年 6 月 28 日　受理 : 2006 年 10 月 17 日）